六祖法寶壇經につきて

鈴木大拙

此は三四年前に認めたものである。尙不足な所があるので、其儘にして置いたが、何時になつて補足の期が來るか、わからぬので、此に發表する。偏へに大方君子の叱正を俟つ。

「六祖壇經」は禪宗で大切な書物の一つである。禪宗なるものゝ支那に盛んに行はるゝやうになつたのは、初祖達磨の「面壁九年」によるよりも、六祖の「本來無一物」に負ふところが多い。達磨が印度禪を傳へたといふなら、之を支那化して、支那人の氣質、性行と稱ふやうにしたのは六祖慧能に外ならぬ。支那で禪を言ふものは何れも六祖を宗師とせぬはない、五家七宗何れも其源を慧能より發する、六祖の「法寶壇經」と云ふは、卽ち彼が曹溪の寶林寺における說法を集めたのである。それ故其大切なとは言ふまでもない。處が、此書の眞僞を問題にしたものが昔から無いではない。それには理由が必ずしも無いとは言はぬ。到底六祖自身の口から出たと思はれぬ文字が「壇經」中處々に散見して居る。此一篇は「壇經」と云ふ文學的作品につきて、其編纂上如何なる變遷を經て來たかを詮索したいと云ふのである。何分材料の少ないのと、見聞の足らぬので、思ふほどの研究の出來ぬ

のが遺憾である。但、大體において「六祖壇經」なるものゝ成立の經過が分明になれば幸である。

一

「景德傳燈錄」第二十八卷に南陽慧忠國師の語を載す、その中に左の句がある。

吾比遊方多見此色、近尤盛矣、聚却三五百衆、目視雲漢云、是南方宗旨、把他壇經改換、添糅鄙譚、削除聖意惑亂後徒、豈成言教、苦哉、吾宗喪矣。

これは忠國師が、南方より來れる禪客が、卽心是佛の義を誤解して、生滅身の外に別に無始以來未だ曾て生滅せざる底の佛性なるものありて、蛇の皮を脱する如く、龍の骨を換うる如く、此不生不滅の佛性のみ身後に殘るものと說くを見て、大いに六祖の深意を誤れるを慨いたときの言葉である。當時の所謂る禪客なるものが、禪の宗旨を解せざりしはとに角として、忠國師の語句の中には二個の事實が肯定せられて居る。そうしてそれが今吾曹が興味の中心となるのである。第一に「六祖壇經」なる書物が其頃既に世間に流布して居たと云ふ事實、第二に「壇經」は一部の人によりて改換せられ、自分等勝手の意見を其中に竄入して、六祖の意旨を滅却し去りたること。此の二つの事實は「景德傳燈錄」を信ずる限り否むべからざるものである。

慧忠國師は六祖に嗣法した一人で、西曆七百七十五年に長逝してをる。六祖示寂の年は七百十三

年であるから、忠國師が慨く所の事實は六祖滅後五六十年間に既に生じたものと見ねばならぬ。果して然りとすれば、六祖には何か、自家の著述でなくとも、弟子のその言說を書き殘したるものありしと云はねばならぬ。猶ほ孔子に論語があるやうに。現時に傳はつてをる所の「六祖壇經」付囑第十に六祖自身の言葉として、「吾於大梵寺說法以至于今抄錄流行、目曰法寶壇經汝等守護遞相傳授度諸羣生但依此說是名正法」と記してあるが、これはどう見ても後人の手にて猥りに附記せられたものと斷定するより外ないのであるから、「壇經」の存立そのものを證する句とはならぬ。又現行本に、或は附錄として卷尾に、或は何等の言譯なく卷首に只「六祖大師緣起外紀」として不完全なる六祖の略傳、又は寶林寺緣起とも名づくべきものを掲げてある。これを附錄として卷尾に加へたる現行本には「門人法海等集」とあれども、卷首に掲げたる本には誰れの作とも書いてない。「全唐文」によると、此「外紀」なるものが法海の「六祖大師法寶壇經略序」として採錄してある。紀事そのものゝ中には何等「壇經」編纂の事がないけれども、文の題が既に「壇經略序」とあるからには、此書物自身の存在は言ふまでもないと松本文三郎博士は其著「六祖壇經の研究」に說いて居る。併し紀事そのものに何等「壇經」に關したることがなくて、「略序」とは那箇の一節を指して言ふのかと怪しめるのであるから、「全唐文」にある如き表題が元より始めからこれに附いて居たものかどうかと云ふ事は、疑を挾めば挾めぬでもない。因より全體が不完全に出來て居て前にも言ふ如く、寶林寺緣

起と六祖生立とも云ふべきものを併せたのに過ぎぬから、此「外紀」は缺文であると見てよい。尙此上に段々と「六祖壇經」成立の因緣は書いてあつたかも知れぬと云へる。さうするとこの所謂る「壇經略序」のみによりては必ずしも「壇經」の存在を證することが出來ぬにしても、南陽の忠國師の言葉は明かに當時既に六祖に何かの說放集があつたと云ふことを說明して居ると決定せらるゝのである。

柳宗元の「賜諡大鑒禪師碑」中に「中宗聞レ名、使二幸臣一再徵、不レ能レ致、取二其言一以爲二心術一其說具在、今布二天下、凡言レ禪者皆本二曹溪一」とある此「其說」と云ふのが「壇經」か何か具體的著作を指示するのか、又單に「取其言以爲心術」といふ其言と同一物を示すのか、何れにも取れさうであると松本博士は考へて居るが、予を以て見れば、「其說」と「其言」とは同一物ではなくして、「其說」は何か別の存在を意味するものと考へる方妥當である。何故と云ふに、論理の上からのみ言へば、博士の如く推定せらるべきであるが、文格か語脈かの上から考へて見ると、「其說が具さに殘つて居て今尙(柳宗元の時代に)天下に流傳して、禪者の本旨となつて居る」と、上の方から續けて讀んで見ると、中宗に答へた意見だけが禪宗の本領となつたとは言ふべきでないと予は思ふ。まして「中宗聞名」と書き出した直ぐ前の方に「其道以二無爲一爲レ有、以二空洞一爲レ寔、以二廣大不蕩一爲レ歸、其敎レ人始以二性善一、終以二性善一、不レ假二耘鋤一本其靜矣」と書いてある。「其說具在」は、どうしても此に柳氏

の意見によりて說明してをる所の「說」であると推定した方が穩かではあるまいか。さうすれば「其說」は「壇經」に現はれた所の六祖の說敎であると見てよからう、卽ち當時における「壇經」の存在には疑を容れる餘地がないと予は思ふのである。

二

「六祖壇經」の存在はこんなことを述べ立てゝ證據するまでのものでないかも知れぬが、始めからその存在を疑ふやうになつたには其理由がある。卽ち忠國師の歎息中に現はれたる第二の事實で分明なる如く、其頃既に六祖の本旨を喪ふほどに改め換へられたとすれば、現存の「壇經」が頗る雜駁なるものであつて、何處までが六祖自身の言葉で、何處が後世の添糅であるか、その見分が餘程つけ惡いやうになつて居るのも勿論であると云はねばならぬ。一句々々につきて泰西の聖書本文批評家がやつて居るやうに、是は何時頃、あれは何時頃と、その挿入の年代までを詮索することは今日の研究では固より不可能であるが、大體の上から見れば、現行本の「行由第一」の如き、「頓漸第八」「宣詔第九」、「付囑第十」の如き六祖自身の言葉を直寫したものとは到底考へられぬと見て毫も差支ない。餘程後人の手が加はつたものと爲なければならぬ。これは常識での判斷であるが、實際の記錄を見ても、雜糅の事實は明白である。所謂る法海の「略序」なるものゝ不完全なる理由も、こんな

ごてごてがあつたからのかもしれぬ。

まだ研究が淺いので、勿論充分の考證は出來てをらぬのであるが、予の見た所では「六祖法寶記」なるものゝ支那に始めて刊行せられたのは、記錄の上へ尋ね得らるゝ限りは、宋の仁宗の時代で至和三年（西暦千五百十六年）の三月である。六祖の示寂は西暦七百十三年であるから、その間三百年以上を經て居る。刊行者は宋の明教大師契嵩（西、千七年生千七十二年寂）で、彼は有名な「傳法正宗記」や「輔教編」の著者で「壇經贊」なるものを書いて居る。彼が「壇經」を校勘して出版せんとした時、郎侍郎と云へるものが其叙を書いた。其末文の一節にかうある。（「鐔津文集」卷十一）

幽六祖之說余素敬之、患其爲俗所增損、而文字鄙俚繁雜、殆不可考、會沙門契嵩作壇經贊、因謂嵩師曰、若能正之、吾身出財、摸印以廣其傳、更二載嵩果得曹溪古本校之、勒成三卷、粲然皆六祖之言、不復謬妄、乃命工鏤板以集其勝事、至和三年三月十九日序。

所謂曹溪古本と云ふは何であるか分らぬ。もし之が曹溪原本と云ふのと同じとすれば、現時弘教書院版「縮刷藏經」の騰四、又は黃蘗鐵眼版の扶一が卽ちそれである。この二つは何れも明藏を本として居る。そうして此明藏の「壇經」につきては「聖教目錄」卷四に次の如く記されてある。

宋元續入藏部、有六祖法寶壇經一卷、曹溪原本、南藏在密函、北藏在扶函、光孝禪寺比丘宗寶所編也、見其編次、卷首有德異序明教贊、經中自行由第一、至付囑第十、列章如今

本」別有二附錄一、載二卷末一、中有二七科一所謂法海等集、緣起外紀、歷朝崇奉事蹟、柳宗元撰賜諡大鑑禪師碑、劉禹錫撰第二碑、幷佛衣銘、令韜錄守塔記、宗寶跋、以上爲二附錄一、（後學閱二彼藏本一可レ令レ考矣）

併し乍ら契嵩の古本と「聖敎目錄」が宗寶所編とせる原本とは同一のものではあるまい。現行本が原本であるならば、これには餘りに多く宗寶の私筆が加へられて居ると判斷せねばならぬからである。とに角、契嵩の時代に在りても「壇經」に對して增損したところが餘程あつたものと見える。慧忠の添糅が六祖の滅後五六十年の間に行はれて「苦哉吾宗喪矣」とまで言はれ、そうして契嵩の增損が三百年の後に亦「殆不可考」ほどに行はれたとすれば、「壇經」の本來の面目は幾重にも塗り更へられたものと云はねばならぬ。契嵩は古本をどんな鹽梅に校勘して六祖の旨をして粲然たらしめたかしらん。そうして侍郎をして「皆六祖之言不復謬妄」と斷定せしめ得たのか知らむ。どこかに此古本が現はれて來れば、流行本と比較檢校して餘程面白い研究が出來るに相違ない。

契嵩に先つこと一百年ほど前に永明の延壽と云ふ禪門の大學者があつた。其人は「宗鏡錄」一百卷の著者として有名である。其書の中に「六祖曰」として引用した文句が處々に見える。それを今日の「壇經」中の句と校合して見ると、時々二三字の出入はあるけれども、大體の意味においては少しの相違もなく、其まゝに殘つて居る。固より「宗鏡錄」中引用の文には長いのはなくて、短いのばかり

であるからそれを以て「壇經」の雜糅性を何かと批評すべきでない。只此等の引文によりて、吾等は慥かに六祖の所言なるものが、ずつと昔より傳はりて居たことを知り得るのである。「壇經」を頭から僞書のやうに考へて居るものも有るやうであるから、此一節を此に挿んでおく。

（筆の序に一言しておきたいと思ふことは、郎侍郎の序文には「壇經」贊とあるに反して表題には「六祖法寶記叙」としてある。其頃は六祖の說敎集を壇經とも法寶記とも云うたものであらうか。忠國師の語に既に壇經とあるからには、始めから其名で通つて來たものとも云へる。「六祖壇經攷證駢拇」の著者は、異本を考うるに「法寶壇經記」とも「壇記」ともありと云うてをる。して見れば「壇經」の名も必ずしも博く一定して居たものではなかつたか。契嵩は「壇經贊」の下に自ら注して曰はく、「稱經者自後人尊其法、而非六祖之意也、今從其舊、不形改易云々」と。されば法寶記、壇記、壇經記など種々の名ありしものか。とに角、此本の題名につきて最も肝要なのは壇の一字に在りとも思はる。これは後にて說き及ぼすべき機會があると思ふが、六祖の受戒した壇なるものが、餘程因緣の深かつたものであつたに相違ない。）

三

宗寶所編の現行本を檢覈するに先ちて、少しく「壇經」が前述の如き運命を通過し今日に傳はらね

ばならなかつた因緣につき所見を述べて見たい。

雲棲の袾宏（西暦、一五三五―一六一五）は「竹窓三筆」の中に六祖壇經を以て「六祖不レ識レ字、一生靡レ事二筆研一、壇經皆他人記錄、故多二訛誤一」と云うて居る。彼は如何にも單純なる理由によりて壇經に訛誤多き所以を說明せんと試みた。第一、六祖が字を識らずと云ふは、一個の傳說で何處まで文字通りにそれを解してよいか、それは餘程の疑問である。次ぎに六祖が筆硯に從はなかつたことは、自餘の宗敎的改革者と一般で、素より彼は袾宏その人の如くではなかつた。「論語」が孔子の門人の記錄である如く、「壇經」も亦六祖の門人の記錄である、何にもこれを以て訛誤の多い事由とするに足りない。まして袾宏の言はんとする所は、六祖が淨土の信者に對して餘り同情を表して居ないのを、何とかして一種の曲護を與へんとするのである。故に其文の結末には「故知執二壇經一而非二淨土一者、謬之甚者也」と云うて居る。袾宏はその一生を擧げて淨土と禪との融和に勉めた人である。禪の正統派は、それで、袾宏を以てけしからぬ人物として大に排斥するのである。

然るに此に「佛祖統記」（西、千二百六十九年編）の第十一卷に、僧統義天と云へる朝鮮王族出の禪僧にして又華嚴僧たりし人の傳記を揭げてある。その末尾に、義天が飛山成珠の「別傳議」と云へる書物に書いた跋を引いてある。其全文は次の如くである。

「甚矣古禪之與二今禪一、名實相遼也、古之所謂禪者藉レ敎入レ禪者也、今之所以禪者離レ敎說レ禪者也、

離教者執其名而遺其實、藉教者因其詮而得其旨、救今人矯詐之弊、復古聖精純之道、珠公論辨斯其至焉、近者遼國詔有司、令義學沙門詮曉再定經錄、世所謂六祖壇經、寶林傳等、皆與焚棄、而比者中國禪宗章句多涉異端、此所以海東人師疑華夏爲無人、今見飛山高議、乃知有護法開士、百世之下住持末法者、豈不賴珠公力乎。

尙「佛祖統記」の著者志磐は述べて曰ふ、「昉師辨祖謂、智矩撰寶林傳、詭說百端、如達磨隻履西歸、立雪斷臂等事、與南山續高僧傳多不同之言、世又謂、壇經談性不異吾宗而於念佛求往西方有似貶斥、義天言遼國焚棄二書者蓋以此也」と。

義天の入宋したるは元祐元年のことで、金山の佛印禪師に謁したり、蘇東坡の接待に預かりたりしてをる所を見れば、前述の契嵩を去ること二三十年を出でぬ。志磐の「佛祖統記」は義天が宋朝に來てから尙二百年の後で南宋が今や亡滅の悲運に瀕しかけて居た時に出來て居る。志磐は義天が遼にて「壇經」を燒棄したと云ふ記事を解して「壇經」の文字が淨土往生の說に不利なりしに由ると云うてをる。尙是より三百年を經て雲棲の袾宏も（前に一言したる如く）「壇經」の淨土に關する意旨が徹底せぬとて、其謬妄を辨じて居るのを見れば、淨業と禪定との二宗旨で支那全土が精神的に治められんとする宋時代に、志磐の如き考を容るゝ餘地は誠にあつたことであらう。併しこれが「壇經」をかくまでに迫害するやうになつた眞の源因とも思はれぬ。これは志磐の註釋よりも寧ろ義天自身の

考の方に據りどころが多いと信ずべきである。

即ち當時禪宗の勢力が非常に盛んになり來りたるより、「壇經」も亦自ら禪者と教人との間に同じく頻りにもてはやされたものに相違ない。禪者は契嵩(「傳法正宗記」を千六十四年に編む)の如く禪宗の祖師を決定的に系統づけて、その宗の威嚴を加へんと思ひ、「佛祖統記」の如き、「釋門正統」(千二百三十七年編)の如きは亦天台宗(?)の主張を著述して禪者に抗抗せんとした。「寶林傳」が今日殘つて居ないのは、教人のために早く宋時代までに堙滅の不幸を見るに至つたのかも知れぬ。「壇經」の如きは之を遼や金やの政府の如き辛辣なる手段をとるには餘り世に知れわたつて居た、又却つて之を利用すれば、神會や、永嘉や、宗密などの關係もありて、教人のために其勢を增す道具とならぬとも限らぬ。それで「壇經」は或る場處、或る時代では焚き捨ての慘死を遂げたが、又一方に在りては種々の增損や雜糅を强いられた。義天が教を忘れたる禪を詰り、又矯詐の弊を歎じ、これを古聖の精純に復せんことを欲し、序でに世の所謂る「壇經」なるもの等を燬くと云ふ記事に說き及ぼすところを見ると、此間の消息が明かに見ゆるのである。志磐や宗鑑が寶林傳を攻擊して擅まゝに其宗を誇大するもの、虛誕無稽にして毫も取るに足らずとなす處などは、明かに教人の反抗心を示して居る。また百丈懷海が叢林の淸規を創定したるに對しても、宗鑑は其佛制に遵ばざるを恨み、猶ほ禮樂征伐の諸侯より出づるが如しと云うてをる。(釋門正統卷四)禪者にも此の如き攻擊を受く

べき罅隙があつたにしても、禪と敎との間に餘程の軋轢があつたことは思ひ半ばに過ぎる。此軋轢は初祖達磨時代からあつたので、六祖に到つて此勢を激成しこそすれ、決してこれを緩和したことはない。此事實は尙後から說明する機會があると思ふが、とに角唐を經て宋に至りて、一方禪者の勢力が非常な發達をなして、從來支那の佛敎界を占領して來た敎學者流の狼狽を起すやうになつてからは、「六祖壇經」の如き始めから餘り確とした歷史を持つて生れて來なかつた書物は何かにつけ所謂る「增損」や「添糅」や「焚棄」の災難を受くるに極つて居る。（大日本續藏經、「釋門正統」卷四、四百十三紙らに、「敎變則禪、禪弊爲〻魔魔熾爲〻賊」とあり、參著すべし。）

明の英宗の正統年間（西曆千四百四十年頃）に示寂した空谷景隆と云ふ禪僧に「空谷集」及び「尙直編」（正統五年五月著西曆千四百四十年）の著述があるが、其後者卷下に左の語がある。

六祖大師法寶壇經第十付囑章曰、師一日喚法海（此處起〻首至於）轉相敎授勿失宗旨、共計七百七十七字、此是金天敎之人、僞造二邪言一、增二入刊板一末章之弊也、詳覽二壇經之意一只是一統說去、分爲二十章一者亦是金天所〻分也。

「金天敎之人」とは遼金の世天台などの敎人を指したものであらう。「金天敎人」とも書してある、別に金天敎と云ふ一派の宗旨があつたわけではあるまい。（尙此金天敎之人は後三卷の蓮經及び金剛經の議論なるものを僞造したとて空谷は非常に憤慨してゐる。）宋の末、元の始めに當りて（？）遼金に

おける義學の敎人が禪に向ひて壓迫を加へたことは、前きに義天が寶林傳及び壇經を焚いたと傳う る記事に對しても明瞭であれば、空谷が「壇經」の一部に敎人の手が加はり居ることを唱道するも固よりの事であらう。「增入せられた邪言」なるものは必ずしも邪言とは思はれぬ、併し六祖の禪の宗旨から見れば、如何にも持つて廻つたことで、「壇經」の價値を增益すべきほどのものでは決してないのである。削りとる方が寧ろ穩當かも知れぬ。とに角敎人（時には禪者その人の方でも）が「壇經」に何か手を出して、此處ばかりでなく、他の箇處にも種々の增損をやつたことは疑を容れぬと云ふべきである。

「六祖壇經攷證駢拇」の著者景霦は此事に就きて左の如く言うて居る。

按遼金世天台等敎人甚惡二壇經中、離レ敎說レ禪、融レ相談レ性者一、焚二棄壇經及寶林傳等一、自爾已來、或增二入邪言一、添二改敎說一、欲レ黨二己之敎一、或分二十一門一、或割二十章一、皆暗昧敎僧之所レ致甚可レ憎、又可レ笑、故空谷禪師知レ之斥レ之、壇經興廢學者詳焉、云々。」

十一門に分けたとか、十章に割いたとか云ふことは、必ずしも其人の暗昧を證明することにもならず、又左程憎むべき笑ふべきことでもあるまいと思ふが、とに角、「六祖壇經」なるものは種々の運命を通過して今日に來れるものなること、これだけは慥かであると思ふ。さうして此の如き運命を喚び起した事由は主として敎と禪との軋轢に在ると予は信ずる。六祖は固より純粹な禪宗の創設者

ではあるが、或る意味から言へば、北宗に對して禪の智的方面を力說した所もある。それで其輩下に荷澤神會の如きもの生じ、それよりして又圭峯宗密の如き華嚴禪をも唱道するものが現はれた。義學の敎人もそれで、六祖を自分等の先祖の一人に加へたいと思ふやうになつたに相違ない。是に於て六祖は遂に敎と禪との間に一種の引張凧となつたわけである。「壇經」は自然何かの機會で添削の禍を受けねばならなかつた。それが往々にして一派の開山なるものゝ通つて行く徑路なのである馬祖とか黃蘗とか云ふやうな、どこから見ても禪者に相違ない人は、其本來の色彩をいつまでも損せずに保持して行ける。「壇經」に色々な增損が加へられたと云ふ事實は明かに「壇經」そのものゝ偉大さを說明してをる。

如上の事由に加うるに唐の武帝が會昌年間に佛敎に與へた迫害などを考へるときは「壇經」が種々の點において增損の禍を受けざるを得ざるに至りしこと自ら明白なりと信ずる。それで是からは現行本そのものに就きて愚見を開陳したいと思ふ。

四

今日一般我邦に流布する所の「六祖壇經」には古鎬比丘德異撰とした序文に南海釋宗寶跋とした跋文が具はつてをる。これに因りて觀ると現行本は何れも元の世祖至元の時代に刊行せられたるを底

本として居る。併しながら此に少し解しにくき事がある。それは德異の序文は至元二十七庚寅の歲として、宗寶の跋は其翌年至元辛卯の夏としてある。跋と序と時を異にするは普通の事で怪しむに足りないが、唯序と跋と內容上何等の照應も反映もないのが不審と云はねばならぬ。或る意味においては兩者却つて反對の事實を提供さるとも見られる。序文に曰はく、

「惜乎壇經爲二後人節略一太多、不レ見二六祖大包之旨一、德異初年嘗見二古本一、自後徧求三十餘載近得通上人、尋到二全文一、遂刊二于吳中休休禪庵一與二諸勝士一同一受用、唯願開卷擧目直入二大圓覺海一、續二佛祖慧命一無レ窮、斯余志願滿矣」

此の如き序文を有せる本ならば、其本は序文の作者によりて刊行せられたものと見るより他あるまい。彼は三十餘年を費やして完本を得んものと苦心したのである、遂に通上人なるものの處において「節略太だ多」からざる「全文」を得た。是において之を吳中の休休禪庵に刊行して有志者と共に經文の功德に預ることゝした。此本は卽ちこれであると云ふのが、此序文の作者、德異の意思である。德異は他人のために此序文を書いた譯でない、所謂自序である。此點においては少しも疑を容れる餘地がない。然るに最後の跋文を見よ、左の如くである。

「余初入レ道有レ感二於斯一、續見二三本一不レ同、互有二得失一、其板亦已漫滅、因取二其本一校讎、訛者正レ之、略者詳レ々、復增二入弟子請益機緣一、庶幾學者得レ盡二曹溪之旨一、按察使雲公從龍、深造二此道一、

一日過二山房一、睹二余所編一、謂レ得二壇經之大全一、慨然命レ工鏤レ梓、顧爲二流通一、使下曹溪一派不レ至二斷絶一。」

跋文の作者と序文の作者とは明かに何等の交渉のないものと見ねばならぬ。跋文の作者が校讎したと云ふ三種の「壇經」の中には德異の所謂「全文」なるものがあつたか、そうして此「全文」にも尙訛があり、略せられたところがあつて、「壇經之大全」を得て居なかつたか。彼の序と此の跋とを有する現行本は德異の「全文」と見るべきか、將た宗寶の(寧ろ按察使雲公の)「大全」と見るべきか。今日の讀者には何と解決のつけやうもないが、現行本には「弟子請益機緣」なるものが第七篇となつて居るから、寧ろ宗寶所編とも見られる。「駢拇考證」の著者は「增入」を解して、

「按古本及宋本無二機緣七編題一、只第十南北二宗見性門中、載二法達智常等三四輩一、今本機緣七中係二尼無盡藏、法海、智通、志道乃至方辨段輪等十有餘人請益機緣一、故之增入、卽宗寶所二加添一也。」

と云うて居る。それ故現行本は宗寶のものに相遠ないと斷じてよからう。まして此跋文にば「一本不レ載レ之新渡本悉載焉」と、かの元祿第九歲に壇經の考證を了へたる景霔によりて註釋を加へられてあるから、現時流布の「壇經」は愈々以て宋寶の刊行を底本としたものに間違あるまい。さらば序文の作者德異が刊行した「壇經」は如何になりたるか。至元庚寅の中春と辛卯の夏と一ヶ年ほどの差で二種の「壇經」が支那で印刊せられたものか、そうして德異の分はそのまゝには日本に傳はらず宗

寶が增補を經た分の中にその序文だけ加へられて渡來したるか。宗寶が既に「三本」を校讐して「大全」を出版したとすれば、別に德異の序文を其儘にしておくにも及ばず、又僅々一年の差で相前後して「壇經」が出たなら後の跋には何か前出のものに對しての引合があつて然るべきである。序は跋を知らず、跋は序を顧みぬとすれば、各其本文を異にするものと見るより外なく、而して現行本は唯一つの本文を有するに過ぎずとすれば、德異の序は只偶然に今日現行本に殘されたものと爲なければならぬ。どうしても德異は宗寶所編の「壇經」に序したものではあるまい。「孝證」の著者が「一本不載之」と云ふ、其跋文のない一本なるものを見たいのであるが、現時尙何處かに存在して居るかしらん。景霈は「考證」の後序に「奚之異寶二師刪邪顯正而後寢得二完全一」と云つて居る。異寶の協力によりて今日の壇經が完璧したやうな筆振である、併しこれは前述の理由によりて何かの錯りと見ねばならん。景霈は博學のやうなれども批評眼に乏しい。

尙現行本には「御製」の序なるものが付いてをる、何朝何帝の作であるが、年代も何も記してないので、全く不分明である。「命二廷臣趙玉芝一、重加二編錄一、鏤梓以傳爲二見性入善之指南一云」と結んであるが、此趙玉芝の何人たるかゞ博學多識の景霈にもわからなかつたと見えて、何とも記して居ない。惜しい事である。併し「壇經」も一たびは焚き棄てられるやうな悲運に際會したが、「御製」の序に見れば帝室保護の下に梓行せられたこともあつたと見える。

五

「壇經」の現行本は既に此の如く數奇の運命に遭遇したので、これを僞書であると考へるものもあるらしい。「註六祖壇經海水一滴」(享保乙巳春)の著書天桂曰く、(卷一、十一紙)、

「老僧在昔覽乎元古佛正法眼藏之中、有四禪比丘篇」云六祖壇經有見性之言、彼書僞言也、非付法藏之書、非曹溪之言句、佛祖兒孫全不依用之書也。」

天桂は大に此說を駁し、見性の字ありたりとて、直ちに「壇經」の全體を抹殺するべきにあらず、彼の「正法眼藏」そのものが後來杜撰の禪和子によりて駢拇の剩語を加へられたりと云ふて居る。元古佛とは道元禪師のことである、「正法眼藏」とは彼が假名文の著述で其弟子懷奘が集むる所、「四禪比丘」は建長七年乙卯夏安居の日道元の草案を懷奘が寫したものと云ふことである。道元の意見によれば、佛法の要は見性ではない。これは大宋嘉泰中に僧の正受が「普燈錄」三十卷を選み進めて其序に、儒は誠意を本旨とし、道は虛心を敎とし、釋は見性を要とすと云ふに反對して、道元が道破した所である。「七佛及び西天の二十八祖、誰れか佛法を以て見性のみとなせるぞ」と、道元はかう考へて、それから「六祖壇經」に見性の文字あるを見て、直にこれを僞書なりと斷定した。天桂は道元の子孫であるけれども、此論鋒には流石に感服しない。達磨も直指見性を言ひ、列祖の施設も人を

して見性せしむる外更に餘事ないのであり、「正法眼藏」そのものも亦見性のためにあらすして何ぞやと云ふべき次第なれば、「眼藏」を讀むにも、大に眼目を具する必要ありと、激語して居る。これは兎に角、道元が見性云々の理由で「壇經」を斷じて僞書なりとか、付法藏の書にあらずと云ふたとすれば、頗る大早計たるを免がれぬ、道元にも不似合な輕卒な考へ方と言はねばならぬ。これは恐らくは彼の語を聞きとりたるものが、眞意を充分に解せずして誤り傳へたものであらう。

現行本の「壇經」は僞書でないまでも、其中には僞書かとも思はしめるほどの不純な文句が、處々に混入して居るは事實であらう。現行本が此の如き情態にあることは多くの「壇經」研究者の一致して居る所である。左に二三を引證する。

傳敎大師が其昔入唐したとき手寫して齎らし歸つたと云ふ「曹溪大師別傳」がある。(傳末に貞元十九、二月十九日畢天台最澄封之の字があるとのことである。これは請來目錄の中に記入してある。)これを始めて欵闕に附したるは祖芳と云ふ人で、寶曆十二年壬午の夏、「別傳」の後序を書いて居る其中に「續叢林公論」(四明笠仙梵仙述)を引用して曰はく、

「六祖初於二市邸一聞二客誦金剛經一、至二應無所住而生其心一、豁然開悟、遂乃求二謁黃梅一、此乃古本壇經所載由緒宛然、蒙於二十七八歲時一、獲レ見レ之、今悉無レ有云々」

「續叢林公論」は鎌倉高時時代の著作である。(著者は來二禪子とも云ふ、元の禪僧にして日本に來る

淨智寺、無量寺、南禪寺、建長寺に、歴住す、西暦千二百九十二年生千三百四十六年寂）予未だ親しく其書を見ざれば、此言に對して何等の批評を加ふべき限りでないが、兎に角「壇經」の古本なるものが其頃にあつたものと云はねばならぬ。後序の述者も「壇經古本湮滅已久、世流布本宋後編修」と云ふて居る。「壇經駢拇考證」の著者は祖芳以前の人で、元祿九年（千六百九十六年）に其著述を公刊してをるが、彼は古本なるものを親しく見たものと見え、其「考證」には古本とし新渡本云々と頻りに引用せられてある。此古本と云ふのは契嵩が宋の至和年間卽ち西暦千五十四年頃に發見したものと同一本であるかと云ふに、これは宋本も古本も見ない予に取りては、不可決の問題である。

景疎は餘程多數の刊行本を見たものと推斷せらるゝが、其「壇經肯窺駢拇考證」の跋文に左の如く云ふてをる。

「窮通有數、盛于唐、哀于宋、繆人甚忌憚、焚毀遂至雜糅相半、莫覩全璧、其間增飾莠言、芟蠲聖意、誣妄後進、爰元異寶二師、刪邪顯正而後寢得完全、逮明宗匠達賢箴釋之者、亡慮六七家、間復有改摠燼餘之糞遺、然披沙便見金諭、索隱而分水乳、眞贋焉廋哉。」

彼が此の如くにして比較校讐したる各種の「壇經」は左の如くである。

一、宋の慶元本、（上下卷、十一門に分つ、日本寛永八年、中野氏鋟梓。）

二、元の至元本、（一卷、十章、寛永十一年、中野氏重鐫。）

三、明の萬曆本、（一卷、分十章、御製序と記とを加ふ、慶安二年日本にて新刊。此に記とあるは明の萬曆甲申秋八節日、恒照齋と云ふ人が「壇經」を印施するについて「六祖壇祖記」なるものを本文の末に添へたのを指すのである。或る人は此恒照齋を以て廷臣趙玉芝の別號となし、無記名の御製は明の神宗ならんと臆測する。併しこれには何等の證據となるべき史實はないのである。）

尙此明の萬曆本に對しては日本に三種の註釋書やうのものが、元祿九年までに出來てゐる。第一、「夾山鼇頭」の「六祖法寶壇經」二卷、萬治二年新行、寛文の末に重行。第二、「六祖大師法寶壇經鈔」四卷、天和三年新刻。第三、「六祖法寶壇經補闕」上下卷、天和三載梓行。

四、李卓吾、金華の原本、（壇統注解）

五、林兆思、「壇經訊釋」（これは林氏全集、貞字函、第四冊中に在り、「壇經」の全篇に涉りての註釋にあらず、此處彼處の文句を取りてこれに林氏自身の意見を加へたもの。）

六、楊貞復の「壇經詳註」、（諸經品節、第十六の中にあり。）

以上六種の外、尙數家の註釋ありとの事である。景疏は水月齋の本及び大清康熙の刊本を對校したと云ふて居る。して見ると、彼が見たる所の「壇經」は頗る廣い範圍に涉りて居ると云はなければならぬ。元祿九年出版の「六祖壇經肯窺、駢拇不證」上、下、（彼自身は四卷と云ふて居るから、元はさ

うなつて居たのであらう、予の本は今五卷に綴ぢてある)、此書は餘程叮嚀に精確に出來て居る。「壇經」研究者には是非なくてはならぬものである。此書の原本となれるは、萬曆年中に重ねて編錄を加うる所の金華所刊の本、卽ち明本なるものである。縮刷藏經及び黃檗版一切經中に編入せられて居るものと同一本である。

景德の「考證」は元祿九年(西、千六百九十六年)の出版であるが、其後三十年を經て、千七百二十五年(享保十年)に曹洞宗の天桂禪師が「海水一滴」を書いた。これは「壇經」の評註のやうなもので、天桂は自分の意見にて本文を批評して行く。「語意不穩又是恐妄添乎」とか、「如上一件切忌怪說、只令愚者又轉愚矣」とか、「以下數百言特是詭辯無實之語、當撇脫抹殺者」とか云ふやうな評言が處々に見える。天桂は常識を以て本文を判斷し、眞贋を甄別せんとしたのである。亦一家の見識たるを免かれぬ。景德が考證を旨として更に本文に對しては批評がましき所更になく、始んど何でも呑鵜み的に受け入れるのと大きに差がある。所編上の性質が違ふからであらう。天桂が「壇經」に對する一般的態度は次の如くである。

「按夫壇經門人粗率筆之、後來妄覩裝之、彼此轉寫、陶陰不分、國師所謂、『把他壇經改換、添糅鄙譚、削除聖意、苦哉吾寫晉矣』是也、吾欲見其善本訪求無有也、故校讐傳燈暨諸本以加註釋。」

現時坊間に流布して居る「壇經」は大抵左の如くであると思ふ。

一、六祖大師法寶壇經、一冊本、（一六七八）黃檗版、（貝葉書院）
一、六祖法寶壇經、一冊、寛永甲戌（十一年、一六三四）中野氏梓行、
一、六祖大師法寶壇經鈔、二冊、天和三年（一六八三）文臺屋梓行、
一、法寶壇經肯窾（孝證駢栂）上下二卷（五冊）元祿九年（一六九六）風同堂版、
一、六祖壇經海水一滴、三冊、享保十年（一七二五）初出、退藏峯藏版、
一、增註、六祖法寶壇經、二冊、明治十八年（一八八五）刻成、矢野氏出版、

此一章を終るに先ちて、尙次の二項を加へておきたいと思ふ。

明の神宗の萬曆年間（西曆千五百七十三年より千六百十九年）には「六祖壇經」の刊行が此に記したものゝ外にまだいくらか有つたものと思はれる。敦山大師德淸と云ふは明末に於ける天禪匠であつたが、其著述や編輯に係る書物は可なりに多い。「夢遊全集」と云ふて大師が文章や作詩を集めたものが五十五卷もある。仲々まめに文筆に從事した人である。自叙傳のやうな年紀體に綴りたものもある。六祖大師の跡を修覆して、曹溪の僧堂を再建したり、伽藍を復興し、千有餘年來の面目に改め直した、その功績は明末の禪史に特筆すべきものであらう。かく彼は特に六祖大師に對して興味を有つて居たところから「壇經」の刊行を二度までやつて居る。刊行の年代は明記してないから、判然とはわからぬが、重刻の時は其文中の句によりて慥かに曹溪の寶林寺を再興してから後のこと、

卽ち萬曆四十年頃であることが知り得らるゝ。「刻法寶壇經序」と題してある文には單に「壇經」が「心外無法、法外無心」の大旨を述べたるを說くに止まりて、本文に對する編纂上の批評は少しもない。之に反して「重刻六祖壇經序」と言ふ方には多少其方面の意見が載せてある。

「余蒙恩於嶺外、幸作六祖奴郎、聊爲料理廢墜之緒、困見經本數刻、多有改竄不一、蓋以後世聰明君子將謂老盧本賣柴漢、目不識丁、怪其所說無文彩、故妄易之耳、嗟乎、大音希聲至文無文、況闡無言之道、假舌相以宣、嗚乎、夫水流風動、皆演圓音、又何文之有、予偶得古本、乃爲勘訂、其所記參差者、復爲整齊、分爲十品、以雅稱經名也、刻於山中、云々」

これに由りて察するに、德淸が曹溪にて見たりと云ふ數刻の經本は何れも改竄を施してあつたものと斷ずべきである。其改竄の理由と見るべきは、六祖が本と賣柴の漢であつたがため、「壇經」の文字が如何にも質素で何等文學上の價値がないので、後世の所謂る聰明な君子がこれに加筆したと云ふことである。然るに德淸はまた別に古本なるものを何處かで得て來て、これを底本となし、記事の參差して居るのを齊へ、章を分ちて十となし、雅稱經名して新たに刻を起した。章を十品に分つたのは、古本は一統に述べ記されてあつたからか、將た宋の慶元版のやうに十一章となつてをるを整齊して新たに十としたものか、何れとも此文章だけでは分明ならぬ。また此十品なるものも之の至元板の十章と如何なる點に於て出入するのか、それも亦不分明である。勘訂をしたり增損をした

りしたと云ふ、記事には此處彼處で出會ふけれども、かく勘訂云々せられたと云ふ原本を見ぬもの故、種々の編者によりて如何なる程度まで加筆せられたか、後世の吾等には何等の推斷の餘地さへもない。これを甚だ遺憾とせねばならぬ。

次ぎに附加した事は「禪籍志」(泉州、佛在庵、聖僕義諦編、元祿癸酉春撰と云ふ序文あり)に、「大珠頓悟要門論」と「壇經法寶記」と云ふ二書を連ね記して解して曰ふ、

「越州大珠慧海禪師、嗣二法馬大師一、師事六載、結庵晦レ跡、自撰二此二書一、以示二學者一云々」

この「壇經法寶記」と云ふのは如何なる書物であるか、聖僕も恐らくは實際に此書を見たわけではあるまい。それよりも予は其書が果して嘗て大珠によりて書かれたものかと疑ふのである。「傳燈錄」や「會元」などには「頓悟要門論」一卷のことは記してある、馬祖が見て「大珠圓明、光透自在、無二遮障處一也」と云ふたは此書である。併し「法寶記」なるものにつきては、予の知る限りでは、「禪籍志」の外何書にも引き合ひに出してない。此の如き書が果して存在して居たか、予は大に怪しまざるを得ないのである。若しあつたとしたなら餘程面白いものに相違なからう。大珠慧海は馬祖道一の法嗣であるから、六祖を去ること遠からぬのである。且つ彼が「頓悟要門論」なるものは、彼が思辨考察の力の如何にも徹底したことを證明して居るのであるから、彼の筆によりて何か六祖に關して宗旨上の記事でも書かれたなら、餘程後世の參考になるものが出來たであらう。

「禪籍志」の選者は「六祖法寶壇經」が遼國によりて焚かれたと云ふことにつきて左の如き意見を述べてをる。

「高麗僧統義天、跋二飛山戒珠法師所著別傳議一文中、稱大遼契丹燔二六祖壇經一爲レ是、余以爲非、何以故、慧能大師稟二生貧家一、不レ識二文字一、及レ爲二第六祖一、所言所行、擧符二天人師之法一、今名二壇經一者、一時門人所レ記、未三初一字有二大師執筆現書一也、是以眞語僞說雜二出其間一、如三群玉中有二瓦礫一、非二醇全書一、如レ曰下念佛願二淨土一不上レ似三十善生二天堂一、甚睽二金口之說一、又抑二秀禪師一爲二未證道之人一、決出レ自二門人我執一、遼人能知二其謬一、欲レ喩二於世一、甚爲二好心一、而欲下悉焚棄無中片葉上者惡矣、雖二七千藏經一、不レ能レ無二瑕瑪一、若知三壇經有二附說一、須下作レ序論レ之以行中于世上、火入二崑崗一、玉石俱燬、遼人何不レ思邪。」

六祖の淨土に對する說が餘程唐以後の佛敎徒を惱ましたものと見える。遼人が「壇經」を燒いたと云ふのは、果して書中の淨土論などに由つたものか、どうかは不明であるが、「壇經」が何かにつけて議論の種となつたことは、確實である。特に支那の佛敎が法相の如き、天台の如き、義學の煩瑣なる辨證法、分類法を厭ひて、禪の如き、淨土の如き、單純直截の宗敎を喜ぶやうになつたとき、「壇經」の如き禪書中に少しでも淨土的宗義を輕んずる傾を有するを見て、多少の不快の念を懷くやうになるは自然の勢であると思ふ。外に在りては、儒と道と釋との合同を唱へんとするものあるに

對して、內には敎と禪と淨土とを混融して一となさんとする傾向が益々現はれて來た。明末に至りて敎は次第に衰へて其跡を留めず、總ての寺院は淨業堂と禪堂とで二分せらるゝやうになつては、禪と淨土と相爭ふ事は全く過去の事となり、今や互ひに相輔け合はぬまでも、相排斥せぬやうに、双方から近付いて來た。そうして現存の「壇經」には左までに淨土往生を斥けるほどの說は見えぬ。「禪籍志」の選者が言ふほどに、「壇經」は西方論者に反對してをらぬ。「常に十善を行ずれば天堂便ち至る」とは言ふけれど、西方往生よりも此方が願はしいとは少しも言はぬ。只「自らの心地上に如來の大光明を認めて、西方淨土を刹那に此處に現前せしめやう」と勸める。禪者の立場としてはこれが尤であると思ふ。往生の願のみありて、十惡の心を斷ずることをせずば、何の佛ありてか來りて吾を迎へ請ずべき。東を願ひ、西を願ひて、而かも自性更に淨からずば、淨土は十萬八千遠ふく遠ふかるべし。六祖の淨土往生論は大體これだけである。「禪籍志」の著者や「佛祖統記」の志磐などが、六祖の淨土說を以て遼人のために燬かれたと云ふは、何等明白なる歷史上の事實によりて證明せられざる限り、只一個の臆說と見るより外ない。燬いたのは何か外の理由によるものと予は信ずる。「壇經」の外に「寶林傳」も焚棄したとあるからには、どうしてもこれは、禪宗を喜ばぬ義學の敎人の勸奬によるものと見るのが至當であらう。又「釋門正統」卷八、及び「佛祖統記」卷十における永嘉大師の傳後に洪覺範の註あり、これによれば、永嘉の「證道歌」も亦焚棄の災に遭ひたるものゝ如くで

ある。されば或は敎人の眼に僞書と映じ、或は彼等より見て餘り願はしからざる著述と思はれたる禪書は總て遼人の虐待を受けたるものか。淨土說は愈々怪しいと見るより外ない。

六

上來の所述によりて、「六祖壇經」と云ふ書物につきての大體の考究を了つた。其結果は左の如き肯定である。

一、六祖慧能の說敎集とも云ふべき後世の所謂る「語錄」に相當する書物は始めから存在して居たことは疑ふ餘地がない。

二、此「語錄」は固より六祖自身執筆したものではない。彼の弟子によりて編修せられた。さうして恐らくは當時より「壇經」と云ふ名で、其時代に播がつて居たのみならず、後世へも傳へられた。

三、「壇經」が六祖の示寂後間もなくそうして以後も引き續きて改竄添糅の禍を受くるに至りたるは事實であるが、其理由は、何にも六祖に文字が無かつたと云ふことに歸すべきではない。「壇經」そのものゝ所說が如何にも直截で、其頃の義學者流の思ひも及ばぬ所に觸れて居たので、容易に了解することが出來ぬ。それで彼等はこれに向つて機會ある每に手を加へた。自分等の宗旨に引きつけ得るやうに、又自分等の了解し得るやうに增損した。或は一擧にこれを焚きたることさへした。

四、併し「壇經」には尙生命があつた。此の如き虐待を受けたに拘はらず、六祖の精神は此書物の一部を通じて閃きわたつた。種々の雜りものを帶びたまゝで、禪宗の本旨は「壇經」の中に潛んで居る。これが「壇經」の今日に尙傳はつた所以である。

五、現行本を檢覈して見れば、六祖が實際に取扱つた問題は餘り多くないと思はれる。「行由第一」は元より六祖の知つたことではない、弟子の挿入に極まつて居る。般若論、西方往生論、定慧論、坐禪論、懺悔論、三身歸依論などが、六祖說法の重要なる題目となつたものであらう。其外にある「壇經」中の記事は弟子及び後人の竄入したものである。故に「壇經」として、卽ち六祖の意見として見るべきものは如上の各論に在るものと予は信ずる。

六、六祖を無學であるとか、眼に一丁字なしなど云ふのは、皆比較的の話で、彼は決してそんな物知らずでない。勿論彼は天台や華嚴の義學者のやうに、哲學者でも又所謂物學びでもない。故に彼は微細な敎理上の詮素とか、博引旁通、一々典據を擧げて自說を慥かめるなど云ふことはせぬ、「自淨其心」より得たる般若の力で、「念々無滯」の眞理を提唱するより外ないのである。それでも「壇經」中に引用してある經典には、法華經、金剛經、楞伽經、涅槃經、維摩經、菩薩戒經、阿彌陀經とか云ふものがある。これは無識の賣柴漢のよく爲るところではない。六祖を矢鱈に「無學もの」としたがるのは敎人に對しての一種の反抗から出るのである。